

平和で豊かな沖縄県を目指す情報誌

無料

ご自由にお持ち  
帰り下さい

2016.8

No.3

# 沖縄協会だより

## 沖縄協会の事業

## 沖縄平和祈念像と 山田真山



沖縄協会は、沖縄が本土に復帰するまでの間、各種の援護活動を行った特殊法人南方同胞援護会(昭和31年～47年5月)の後を受けて、昭和47年9月20日に設立された内閣府所管の公益法人です。新たに設立した財団法人沖縄協会は、南方同胞援護会の実績と経験を活用して、沖縄の振興施策に積極的に協力し、平和で豊かな沖縄県の建設に寄与してまいりました。平成23年(2011)4月1日、沖縄協会は内閣総理大臣より公益財団法人として認定を受けて「公益財団法人沖縄協会」として新たな一歩を踏み出しました。これからも、沖縄県の健全な発展と幸福な社会形成に役立つ事業を行いながら、沖縄平和祈念堂の管理運営をすることで、平和で豊かな沖縄県の建設に貢献していきます。

公益財団法人 沖縄協会

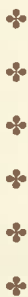
# 公益財団法人 沖繩協会の事業

## ■ 沖繩青少年勉学支援制度

この制度は昭和48年に本土（沖繩県以外の都道府県）で働きながら学ぶ沖繩県出身の青少年を支援するために設置された給付奨学金。この制度に賛同いただいた沖繩県出身者や沖繩に深い関心を寄せられている多くの方々から温かい寄附金でつくられた「働きながら学ぶ沖繩青少年支援基金」の果実で勉学支援金を支給している。

これまで延べ1110人の沖繩青少年を支援し、卒業後は習得した資格や技術を活かしてそれぞれの進路を歩んでいる。

平成28年度の募集は4〜6月まで行われ、審査の結果7人の新規勉学支援生が決定した。本年度の勉学支援生は前年度からの継続者3人を加え10人。



## ■ 沖繩関係団体等助成事業

### 沖繩県豆記者団本土取材活動

当協会が沖繩関係団体助成事業の一環として毎年協力している沖繩県豆記者団（主催：沖繩県豆記者交歓会）は沖繩県内の小・中学校より選ばれ、取材活動や交流活動等の体験をとおし、社会に対する視野を広げ、思いやりのあ

る心豊かな児童生徒を育てることを目的に実施されている。今年の第55次沖繩県豆記者団（50人）は8月1日から6日にかけて取材活動を行った。8月1日、羽田空港到着後都内を見学取材し、函館豆記者12人と交流会を行った。2日は国会議事堂を見学後、総理大臣官邸で島尻安伊子沖繩及び北方対策担当大臣同席のもと安倍晋三内閣総理大臣を表敬訪問し、その後内閣府沖繩担当部局取材を行った。3日午前中は世田谷区表敬訪問取材を行い、夕方からは東宮御所を訪れ、皇太子同妃両殿下並びに愛子内親王殿下にご接見した。4日から北海道に移動し北海道庁や根室市で北方領土取材を行い取材活動を終了した。

## ■ 金城芳子基金

『金城芳子基金』は、沖繩女性の地位向上のために献身された金城芳子氏（1902〜1991）のご意志を受け継ぎ発展させるため、そのご遺族によって平成4年に当協会に設置され、社会的に優れた個人及び団体の研究、調査に助成している。

今年度の助成対象は、沖繩県立看護大学大学院生（博士後期課程）大城真理子

# 知と 沖繩平和祈念像と山田真山

沖繩平和祈念堂に安置されている沖繩平和祈念像は、沖繩出身の偉大な芸術家、山田真山画伯（1885〜1977）が、全戦没者の追悼と世界平和を希う沖繩県民の心を一身に担い、晩年の全生涯を捧げて制作された。高さ約12メートル幅約8メートルの人間の祈りの姿を象徴した座像。

宗教や思想、政治や人種、あるいは国



山田画伯は、1885年（明治18年）12月27日、沖繩県那覇市生まれ。東京美術学校に学び東京で日本画、彫刻、工芸の創作活動を行う。1940年（昭和15年）に沖繩に帰り沖繩戦を体験。長男を上海、三男を沖繩戦で失う。1957年（昭和32年）、平和祈念像の制作を決意。以来18年の歳月をかけて原型を完成させる。原型完成後の1977年（昭和52年）1月29日、92歳で死去。

■ 代表作  
日本画「琉球藩設置図」（明治神宮聖徳記念絵画館）  
彫刻「林和靖像」（宮内省御用品）

氏の「沖繩女性の乳がん受診遅延者を減らすために遅延予防の援助方法の確立に向けた研究」に対する事業が決定し、同基金運営委員会が7月27日に沖繩

を超えてすべての人が戦没者の慰霊と平和の一点に力を合わせていこうということを10本の指を合わせた合掌の形に表現されている。特に、この像は沖繩の風土が生んだ世界に例のない独特な琉球漆器の伝統的漆工芸技法、漆に粉の絵の具（顔料）を混ぜた堆錦（ついきん）で漆器に装飾を施す独特の技術を基につくられた。山田画伯は、本来平面的に使われてきたこの堆錦技法を立体的な彫刻に活かす技術を研究開発され、この平和祈念像を堆錦、すなわち漆そのものでつくりあげた。特殊な立体堆錦技法によって完成したこの像は、耐久性に富み沖繩の風土が生み出した芸術品である。

恒久平和を祈念する人々の思いを集めて、静かに合掌する祈念像は、悲惨な戦争を体験した者達が、後世に伝える、尊い精神的遺産であり、そして、堆錦という世界にも稀な、沖繩の伝統工芸技術の傑作であり、芸術的価値も大きく、永く後世に伝えるべき貴重な文化遺産である。

県庁で助成金贈呈式を行った。

平成5年度の開始から今年度までに24の個人・団体に助成を実施した。



第37回  
沖縄研究奨励賞受賞者

ジェームズ・デイビス・ライマー氏の研究報告

沖縄島東海岸内湾の  
砂泥底から見つかった新種

## ヒメダルマ スナギンチャク について

しい、軟らかく不安定な砂泥底での生活に適応した「ダルマスナギンチャク属」に属する。ダルマスナギンチャク類の新種発見は実に100年以上ぶりとなる。本種は現在のところ沖縄島東海岸の大浦湾および金武湾の2か所でのみ生息が確認されている。本種の生息環境であるサンゴ礁域の内湾砂泥底生態系は、埋め立てや陸水の流入等の人為攪乱によって縮小・消滅の危機にある。以下に詳細を記す。

### 不安定な砂泥に適応した ダルマスナギンチャク類

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室の藤井琢磨特任助教（元琉球大学理工学研究所博士研究員）および琉球大学理工学研究所のジェームズ・デイビス・ライマー准教授によって、スナギンチャク目の新種が7月22日付で、国際学術誌、Zookeysにて発表された。新種 *Sphenopus exilis*（和名：ヒメダルマスナギンチャク、以下本新種）は、スナギンチャク目としては珍



新種 *Sphenopus exilis*  
ヒメダルマスナギンチャク

左：ポリプ全体の標本写真  
上：生時の生態写真（2012年5月24日、金武湾、水深約15m）  
図中の縮尺は約1cm



スナギンチャク目は刺胞動物門花虫綱六放サンゴ亜綱に属し、造礁サンゴとして知られるイシサンゴや、イソギンチャク等に近縁の生物。固い骨格は作らず、環境中から砂粒等を体内に取り込むことが大きな特徴である。サンゴ礁域における多くの種は、造礁サンゴ同様に無性生殖によって増えたポリプが連なった群体を作り、岩盤に固着して生活する。しかし、本目の1グループであるダルマスナギンチャク属は、岩盤に付着せず、群体も形成しない。砂や泥の中に体を埋め、口や触手を海底上に広げて海中に漂う有機物を捕食して生活する変わったスナギンチャク類である。ダルマスナギンチャク属は3種が知られていたが、ともに1870〜80年代に新種記載されたもの。今回の新種発見まで100年以上もの間、本属に関しては新種の発見はおろか、

世界的な分布も数例しか知られていなかった。本新種は属内で最も小さい体を持ち、（他属のスナギンチャク類では岩に付着する部分の）基部が細く伸びることが大きな特徴。細く伸びた「足」の部分は、不安定な砂泥底で流されないうよう、錨のような役割をしていると考えられる。

### 減少の危機にある内湾 砂泥環境に特異な生物多様性

本新種は流れが緩やかな内湾の砂泥底での生息に適した形をしており、これまで大浦湾および金武湾のみから生息が確認されている。近年、サンゴ礁域の内湾砂泥底は、典型的なサンゴ群落（透明度が高く、高被度のサンゴ群落が存在する、一般的なイメージの「サンゴ礁」環境）とは全く異なる生物の生息が知られ始めた一方、埋め立てや陸からの汚水流入等の人為攪乱の影響を受けやすい脆弱な海洋環境の一つであることも知られている。沖縄島東海岸における2湾でも、基地建設による埋め立てやダムからの大量の汚濁水流入など、今後の人為攪乱による本種の生息環境の悪化が危惧される。本新種の発見は、いかにサンゴ礁域の内湾環境の生物多様性への理解が不足しているかを示す良い例である。国内では奄美大島や八重山諸島周辺海域にも同様の内湾環境が知られるが、開発等により更なる環境悪化が進む前に、より詳細な分布調査を行う必要がある。

### ■安倍晋三内閣総理大臣

平成28年6月23日、安倍晋三内閣総理大臣が沖縄平和祈念堂を訪れた。安倍総理は、沖縄県主催「平成28年沖縄全戦没者追悼式」に参列のため来沖し、国立沖縄戦没者墓苑の参拝に続いて平和祈念堂に到着された。

平和祈念堂では安倍総理を野村一成当協会会長と尚弘子副会長、比嘉正詔専務理事が出迎えた。

安倍総理は出発に際し、正午の黙禱に合せて行う平和の魂1放蝶セレモニーに参加する沖縄平和祈念堂大使や多くの児童・生徒・引率の方々との記念撮影をされ、そのあと、一人一人に声をかけ、さくに握手を交わした。



### ■スジャン・チノイ駐日インド大使

平成28年7月11日、スジャン・チノイ駐日インド大使が視察のため沖縄平和祈念堂を訪れた。

平和祈念堂では比嘉正詔専務理事が出迎え、山田真山画伯の沖縄平和祈念像制作の経緯などの説明を行った。スジャン大使はその説明に熱心に耳を傾けられた。また、比嘉専務理事からスジャン大使の来堂を記念して、世界平和への祈りが込められた「琉球てまり」の贈呈が行われた。

# 沖繩平和祈念堂開催「慰霊・平和祈念行事」

## 沖繩平和祈念像「浄め」

平成28年6月14日、沖繩平和祈念堂恒例の沖繩平和祈念像「浄め」が行われた。この浄めは、毎年6月23日「沖繩慰霊の日」と「沖繩全戦没者追悼式」、そして、6月22日に平和祈念堂で行う当協会主催「沖繩全戦没者追悼式前



夜祭」を厳肅な気持ちで迎えるために実施している。

今回も沖繩バス(株)の新人バスガイドと沖繩県工芸振興センターの職員・講師・研修生、そして、引率の先生・関係各位の参加があり、平和祈念堂管理事務所職員とあわせて20人で作業を行った。参加者は戦没者への深い思いと世界の恒久平和を願い、平和祈念像全体の埃を払い、浄めた。浄めは慰霊の日の前と年末の2回実施している。工芸振興センターの皆さま

## 協会主催・共催関連行事

んと男性職員が平和祈念像の上部の頭から顔、肩、合掌する手と全体をやわらかい白い布で丁寧にふき拭いた。また、作業と同時に祈念像表面の劣化等の状態を確認した。

バスガイドの皆さんは台座から龍の彫刻まで埃をきれいにふき取り、そして、全国から修学旅行に訪れた学校団体をはじめ各種団体から奉納された折り鶴や平和宣言、メッセージパネルなどの整理を行った。

### 平成28年度

#### 沖繩全戦没者追悼式前夜祭

平成28年6月22日、当協会は平成28年度沖繩全戦没者追悼式前夜祭を開催した。この行事は、沖繩慰霊の日と沖繩県が主催する沖繩全戦没者追悼式をより意義あらし



めるため、沖繩県(二財)沖繩県遺族連合会、(公財)沖繩県平和祈念財団の共催を得て毎年開催している。

当日は、県民をはじめ沖繩県遺族連合会や日本遺族会の関係者、各関係機関の代表など約400人が参列し、戦没者の冥福と世界平和を願った。

第一部式典では「鎮魂の火」の献火、「平和の鐘」の献鐘を合図に参列者全員で黙祷を捧げた。

主催者を代表して野村一成当協会会長が「二度と戦争の悲劇を繰り返さないよう、戦争を体験した世代から戦争を知らない世代に、正しく伝えられることが大切。戦没者追悼の象徴である平和祈念堂から全世界の人々に、恒久平和の実現を訴え続けていくことを誓う」と鎮魂のことはを述べた。

第二部は、琉球古典音楽各会派による合同・独唱献奏や代表舞踊家による琉球舞踊が奉納された。

### 沖繩慰霊の日

#### 「平和の魂」オオゴマダラの放蝶

平成28年6月23日、当協会は戦没者への鎮魂と平和の願いを込め、沖繩平和祈念堂



の玄関からオオゴマダラ約12匹を摩文仁の空に放った。

当協会では、戦後60年事業として平成17年11月に「清ら蝶園」を建設。ギリシャ語で蝶のことを「プシケ(魂)」の意」ということから、蝶園で平和の「魂」としてオオゴマダラを育て、戦没者を追悼し世界平和の実現を祈る平和祈念像の使者として慰霊の日に放蝶している。今年で11回目を数える。

当日は、沖繩平和祈念堂大使をはじめ、ガールスカウトの児童・生徒をはじめ関係各位を合わせた53人が参加した。

はじめに、正午に合わせて平和の鐘を打ち鳴らし、参加者全員で戦没者へ黙祷を捧げた。そして、子ども達が手に持つ蝶を二斉に放し、放たれた蝶は美しく摩文仁の空に舞い上がった。

## 協会主催・共催関連行事

### ぬちぬぐすーじさびらコンサート in 摩文仁

#### 「第1回モーツァルト・レクイエムコンサート」

平成28年6月19日、平和の礎に刻銘された24万余の人々の追悼と恒久平和の祈りを世界に発信する、ぬちぬぐすーじさびらコンサート in 摩文仁「第1回モーツァルト・レクイエムコンサート」主催・レクイエムコンサート実行委員会、共催・沖繩県立芸術大学、沖繩協会が沖繩平和祈念堂で開催された。

沖繩戦後 生き残った我々が元氣を出して頑張ろうと民衆を励まし、勇気づけ、沖

繩の復興に尽力した小那覇舞天(小那覇全孝)氏の言葉「ぬちぬぐすーじさびら(命のお祝いをしましょう)」をタイトルにつけ、あらためて戦没者に深く思いをいたし、戦争、基地のない平和な沖繩に向けて努力していく決意を込めて開かれた。

訪れた約230人余の聴衆は厳かに堂内に響きわたる県立芸大オーケストラと沖繩レクイエム合唱団70人によるモーツァルト「レクイエム」全曲の演奏と独唱・合唱に深く魅了され、感動を覚えるとともに惜しめない拍手を送った。

